

皮膚科のトリビア

181

浅井 俊弥
Asai, Toshiya

浅井皮膚科クリニック

〒240-0013 横浜市保土ヶ谷区帷子町1-14

<http://www.asai-hihuka.com>

本欄は、小誌編集委員の浅井先生が学会・研究会などで見聞きした「皮膚科のトリビア」をその都度まとめ、連載しています。ご意見等ございましたら、ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

トリビア(trivia)=3を意味するtriと+道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにでもある場所」、そこから転じて「瑣末なこと」となり、今では雑学的知識、豆知識、などを意味する言葉として定着している。

●第65回日本アレルギー学会から

令和元年6月16日

特発性間質性肺炎では抗CCP抗体を調べておく

抗シトルリン化ペプチド(CCP)抗体は、関節炎の発症に先だって数年前から血清中に出現するため、関節リウマチ(RA)の早期診断に有用な自己抗体であり、関節破壊のリスクファクターとしても明らかとなっている。特発性間質性肺炎と初期診断された患者のうち、抗CCP抗体の測定を行った370例を後方視的に検討したところ、24例(6.5%)が陽性だった。観察期間中にRAを発症したのは陽性群では10例、陰性群では5例で、5年累積RA発症率は陽性群が55%、陰性群が2%だった。とくに若年あるいは女性の特発性間質性肺炎はRAの発症に注意して経過観察する必要がある。

一言コメント

「抗CCP抗体がRAの早期診断に有用なことはわかっていたが、特発性間質性肺炎の患者でも抗CCP抗体の測定をルーチンで行う意味があるということ。ちなみに抗CCP抗体の発見の始まりは表皮のフィラグリンに対する自己抗体の陽性率が高いこと、そして抗原性を発揮するうえでフィラグリンがシトルリン化されることが重要であることがわかり、人工的に作製した環状化シトルリン化ペプチド(cyclic citrullinated peptide: CCP)を抗原とする抗CCP抗体の測定系が作られたとのこと。フィラグリンとは知らなかった。」

●第65回日本アレルギー学会から

令和元年6月16日

造血幹細胞移植後の食物アレルギー

70歳代の男性。骨髓異形成症候群で非血縁者間臍帯血移植(CBT)を施行され、4カ月後からクリームシチュー摂食後にアナフィラキシーを発症、2年半後に鶏卵摂食後にもアナフィラキシーを生じた。ミルク、卵白の特異的IgEが高値で、経口負荷試験も陽性。ドナー由来のアレルゲン特異的T細胞あるいはアレルゲン特異的成熟B細胞が移行したためと考えられる。成人や高齢者で発症する食物アレルギーでは移植の既往も確認が必要である。

一言コメント

「確かに、高齢者でミルクや鶏卵の即時型アレルギーをみることはないの、よほどの事情があると考えるべきである。貴重な症例だった。」

●第65回日本アレルギー学会から

令和元年6月16日

bird-egg症候群

50歳代の女性。3年前から半熟卵の摂食後に顔面の腫脹が生じ、鶏の照り焼きや親子丼の摂食後には蕁麻疹、鼻閉、咳嗽をきたした。5年前から飼育しているセキセイインコの鳥かごを清掃した際に鼻炎症状と眼脂が誘発されることを自覚していた。血清特異的IgEは卵黄、卵白、鶏肉、セキセイインコの羽毛

と糞が陽性。コンポーネント解析ではGal d1 (オボムコイド), Gal d2 (オボアルブミン) は陰性だが, Gal d5 (血清アルブミン) が陽性。IgE イムノブロットではセキセイインコ羽毛抽出液の70 kDのバンドが卵黄抽出液で阻害され, bird-egg症候群と診断。鳥との接触と非加熱鶏卵の摂食を避け, 7年後には抗体が陰性化し, 鶏卵アレルギーも寛解した。

一言コメント

「これは経気道感作のようだ。成人発症の鶏卵アレルギーでは, 鳥の飼育歴を聴く必要があると知った。患者は鶏肉の摂取も可能になったようだ。」

●第65回日本アレルギー学会から

令和元年6月16日

妊娠中の女性はアマニ油を摂るとよい

ω3脂肪酸がアレルギーの発症を抑制するという話題。卵アレルギーのため下痢になるモデルマウスを使い, 大豆油4%を含むエサで飼育した群と, アマニ油4%を含むエサで飼育した群を比較。後者がアレルギー性下痢の発症を抑制することがわかった。アマニ油などに多く含まれるαリノレン酸は, 体内でEPA, DHA変換され, さらに17,18-EpETEという代謝物が生成される。この物質は血液中から炎症部位への好中球の皮膚への浸潤を抑制し, アレルギー性接触皮膚炎を抑制することがわかった。また, 母体がアマニ油を摂取することで母乳へも移行し, 母乳中の17,18-EpETEを介して児のアレルギーの発症も抑制された。

一言コメント

「ヒトの母乳にも17,18-EpETEの存在が確認されているとのこと。すべての妊娠中の女性に勧めるべき食品といえるかもしれない。」

●神奈川アレルギーフォーラムから

令和元年6月27日

トコジラミに効く殺虫剤

トコジラミに刺された患者に勧める殺虫剤はこれ! という話。「トコジラミ ゴキブリ アース」はマイクロパウダー入りの駆除剤。トコジラミは這いずって移動す

るため床に撒いておくといふ。「ゴキジェットプロ 秒殺+まちぶせ」は速効性と残効性によるまちぶせのW効果で, 壁や柱の割れ目などにスプレーしておくといふ。いずれも, 450 mL缶中イミプロトリン(ピレスロイド系)0.5 g, メトキサジアゾン(オキサジアゾール系)0.41 gの組成。

一言コメント

「アース製薬の『害虫駆除なんでも事典(<https://www.earth.jp/gaichu/>)』は患者の指導に役立つので, ときどき使わせてもらっている。敬意を表して製品名をそのまま記載しておく。いずれも第2類医薬品のためネット販売はされていない。」

●デュピクセント発売1周年記念講演会から

令和元年7月13日

自然リンパ球(innate lymphoid cells)の分類とILC2の機能

ヘルパー活性を有する自然免疫系のリンパ球は, Innate lymphoid cells (ILCs) と総称され, 産生するサイトカインによって3つに分類されている。抗ウイルス/抗腫瘍免疫においてIFN γ を産生するILC1, 寄生虫排除/アレルギー性疾患においてIL-5やIL-13を産生するILC2, 自己免疫疾患においてIL-17やIL-22を産生するILC3である。ILC2は他の免疫細胞の成熟マーカーや抗原認識受容体を発現せず, 傷害を受けた上皮細胞から放出されるIL-25やIL-33などのサイトカインに強く応答し, IL-5やIL-13などの2型サイトカインを迅速かつ多量に産生することで寄生虫排除やアレルギーの病態形成に寄与すると考えられている。さらに脂肪組織, 肺, 腸, 皮膚, 骨髄, 脳, 筋肉など全身のさまざまな組織に存在することがわかり, アレルギー性炎症の惹起以外にも, 肥満や線維症などの慢性炎症やRAなどの自己免疫性疾患の制御にも関わっている。

一言コメント

「とくにアレルギー性疾患におけるILC2の重要性は世界中で注目されていて, ILC2の活性化の抑制がアレルギーの発症ないし増悪の抑制につながるとして, 新規治療ターゲットとしての開発も進められている。講演でしばしば聴くようになったので, 頭のすみに置いておこう。」